

# 他動詞が用いられる中国語の受身文について

## 路 浩宇

### 0. はじめに

马真(1997:165)は中国語の受身文の構造について“从结构上来说, ‘被’字句里的动词必须是一个及物动词, 而且它的前后也总要有一些别的成分(除非那动词是双音节动词)”[構造上からいえば、“被”構文における動詞は他動詞<sup>1</sup>でなければならない。さらに、その前後には常にほかの文成分が必要となる(二音節動詞の場合を除く)]と述べている。次の例で受身文における述語を見てみる。

- (1) 自行车被小偷偷走了。(马真 1997: 164)  
[自転車が泥棒に盗まれてしまった。]
- (2) 这个办法没有被他采纳。(马真 1997: 165)  
[このやり方は彼に受け入れられなかった。]
- (3) \*他被这种病折磨。
- (4) a 我送给他的钢笔被他扔了。  
[私が彼にあげた万年筆は彼に捨てられてしまった。]  
b??他丢掉的钢笔被我捡了。  
[「彼のなくした万年筆が私に拾われた。」の意味]
- (5) a 房子被拆了。  
[家が解体された。]  
b\*房子被盖了。  
[「家が建てられた。」の意味]

上の例(1)と(2)ではいずれも他動詞が述語に用いられている。単音節の他動詞が述語になる例(1)は、補語を用いなければ受身文にならない。これに対し、二音節の他動詞が述語動詞になる例(2)は、補語が用いられなくても受身文として成立する。一方、例(3)では二音節の他動詞が用いられているものの、受身文としては成立しない。こ

れは马真（1997：165）のいう「二音節の他動詞は単独で受身文の述語になれる」には当てはまらないものである。また例（4）における述語動詞はいずれも他動詞であるものの、“扔”を用いた例（4a）が自然であるのに対し、“捡”を用いた例（4b）は不自然となる<sup>2</sup>。更に、述語以外のすべての部分が同じである例（5）の a と b では、“盖”を用いる（5b）よりも、“拆”を用いる（5a）の方が適切な表現とされる。以上の例から、他動詞述語であっても一定の条件を満たさなければ受身文の述語にはなれないことがわかる。

本稿では例（3）～（5）のようなケースを研究対象に、受身文で用いられる他動詞の性質及び受身文の「動作性」と「結果性」を表す方法についてまとめた上で、受身文の成立に影響する諸要素の分析を試みる。

### 1. 受身文の「動作性」と「結果性」

王还（1983）は中国語の受身文について“決定‘被’字句能否运用最关键的是动词。能用于‘被’字句的动词都是有处置性的，就是说动词必须是代表发自某人、物的一种有意识的或无意识的动作，对另一人物有所影响的”[“被”構文を使用できるかどうかを決める鍵となるものは動詞である。“被”構文に用いられる動詞はすべて処置性を有する。すなわち、動詞は必ずある人や物の意識的、あるいは無意識の動作を表し、ほかの人や物に何らかの影響を与える]と述べている。次の例（6）～（8）で王还（1983）が指摘している受身文の特性をみってみる。

（6）集合起来的队伍早已被解散。（王还 1983）

[集合した隊列はとっくに解散させられた。]

（7）孩子被狗咬了。（王还 1983）

[子どもが犬に咬まれた。]

（8）椅子让小王拉倒了。（木村 1992）

[椅子が王君に引き倒された。]

例の（6）～（8）にはいずれも「ある人や物の意識的、あるいは無意識の動作を表し、ほかの人や物に何らかの影響を与える」という特性が見られるが、それぞれの表現方法は異なっている。

例(6)は“解散”という動補構造から成る述語動詞によって受身文の特性が示されている。前の動作動詞である“解”は「集合した隊列を分散させる」動作を表しており、後の“散”は“解”という動作の結果、つまり、「隊列の分散した状態」を表す。“解散”のような動詞は後の成分が前の成分によって導き出された結果を示す動補構造を持っているため、動作と結果を表すことができ、単独で受身文の述語になれる。

一方、例(7)の述語は動作動詞の“咬”だけであるが、この文には文面には顕在化しない結果が生み出されている(例えば、子どもは犬に咬まれて“傷、疼、死…”といった結果になったという可能性が想定される)。つまり例(7)における述語動詞の“咬”は、例(6)の“解散”のように結果を明示するわけではないものの、その動作に必然的に何らかの結果を含意するのである。このような動詞は助詞“了”を付加するだけで受身文の述語になれる。呂叔湘主編(1992:219)では、“杀”、“撞”、“扔”、“卖”等の動詞の後ろに来る“了<sub>1</sub>”<sup>3</sup>は、動作によって結果が生じたことを示すマーカーとなっており、動詞の後ろに来る“掉”と機能上類似していると指摘されている。

一方、例(6)、(7)と異なり、例(8)における述語動詞である“拉”は働きかける動作のみを表し、動作の結果は表さない。従って、結果を表す文成分がなければ単独で受身文の述語になれない。例えば、

(8) 椅子让小王拉倒了。

(8)' \*椅子让小王拉了。

(8)'は結果としての対象への必然的な影響が述語動詞の“拉”の語義に含まれていないため、受身文としては成立しない。これに対し、例(8)における様態補語(“倒”)は動作・行為の結果を説明する役割を果たし、更に受け手(“椅子”)の仕手に作用され、立った状態から倒れた状態になるという状態変化を表している。

以上受身文において仕手が能動的に働きかける「動作性」と、受け手に結果の事態が生じる「結果性」は共に受身文の共通する特性であり、受身文の文法特徴を際立たせているといえる。

以上をまとめると、受身文の「動作性」と「結果性」を表す方法は

次の三種である。

- i 結果を含意する動補構造からなる二音節の述語動詞  
(例：“解散”、“打败”、“削弱”、“提高”、“推翻” …)
- ii 「結果性」がその動作の実行に伴う動作動詞＋助詞“了”/補語  
(例：“咬”、“扔”“杀”、“撞” …)
- iii 「結果性」がその動作の実行に伴わない動作動詞＋補語  
(例：“拉”、“找”、“推” …)

ここで、例(3)に戻り、この例が受身文として成立しない原因を分析してみる。

(3) \*他被这种病折磨。

(3)' 他被这种病折磨<了好几年>。

[彼はこの病気に何年間もさいなまれた。]

述語動詞の“折磨”は「動作性」を有するものの持続動詞であり、動作が完了する限界がなく、結果性を含意し得ない。このため、文全体として「動作の受け手が動作・行為を受ける」という意味は表すことができるものの、その影響によってどのような変化が生じるのかを表すことはできない。しかしこれに数量補語の“好几年”を加えると、「結果性」が補足され自然な表現となる(例(3)')。

## 2. 受身文に用いられる他動詞の不平衡現象

同じ性質を持つ動詞であっても、受身文での受容性が同じであるとは限らない。本節では例(4)と(5)におけるaとbの相違を第1節で述べた「動作性」と「結果性」を表す三つのパターンと関連させ、述語動詞の意味的特徴という立場から検討する。まず、例(4)をしてみる。

(4) a 我送给他的钢笔被他扔了。

[私が彼にあげた万年筆は彼に捨てられてしまった。]

b??他丢掉的钢笔被我捡了。

[「彼のなくした万年筆が私に拾われた。」の意味]

b' 他丢掉的钢笔被我捡<到了>。

[彼のなくした万年筆が私に拾われた。]

例(4)のaとbはいずれも動作動詞からなる述語を有し、「V+了」の構造を用いている点では共通しているものの、受身文としての容認度が異なる。(4a)の“扔”という動詞は物を処分する動作を表す。つまりこの動作の実行によって持っていたものが手から離脱するという結果が含意されているのである。一方、(4b)の“捡”という動詞は“扔”と反対に、動作主が落ちている物を手を出して取る動作を表し、獲得義を有している。ここで注意すべきなのは、重力が“扔”と“捡”の動作の実行に異なる影響を与えている点である。“扔”という動作は、ものが手から離脱して重力方向に沿って自然に落下することを示している。これに対し、“捡”という動作の実行は重力の作用を克服しなければならない。つまり重力が“捡”という動作の実行に与える影響は“扔”という動作の実行に与えるものより大きく、“扔”という動作の方は“捡”よりも実行しやすい。例(4)における動詞の意味的特徴の相違と同様に、例(5)にも同じ認識が成立するものと考えられる。

(5) a 房子被拆了。

[家が解体された。]

b\* 房子被盖了。

[「家が建てられた。」の意味]

b' 房子被盖<好>了。

[家が建てられた。]

例(5)の述語動詞である“拆”と“盖”という動作が実行される際には、力の作用が異なっている。“拆”は組立てられているものや組織をばらばらにして、全体の形やまとまりをなくすことを示す。一方“盖”は建物を造ることを表す。家を解体する際、壁や屋根等が自然に倒れる場合があるが、それに対して家を建てる際には、デザインやコンクリートの注入など人間が意識的に様々な作業を行わなければならない。解体工事よりも建設工事が多くの労力を必要とするのは自明である。

以上の分析により、“扔”と“拆”のような事物を離散させる意味を

有する動詞は「事物が自然に消失する」という「結果性」を有するため、上述のパターン ii に属することがわかる。このような動詞の後ろに来る“了”は「～してしまう」という意味を含意するため、ほかの補語を付けずに文を完結させることができる。

一方、例 (4b) と (5b) の獲得義を表す動詞である“捡”と“盖”は力で事物に働きかける過程しか表さず、これだけでは動作が完了する限界を表すことはない。よってこれらの動詞は「結果性」を有さない動詞であるパターン iii に属すると考えられる。このような動詞が受身文の述語になるためには、必ず補語を伴わなければならない。このため、“捡”の後に終着義を表す補語等を付加した場合には、落ちていた“钢笔”が“捡”という動作の実行によって下から上に移動するという変化のニュアンスが出てくるため、文が完結する。例 (4b) が (4b') になると自然な表現になるのはこのためである。

(4) b<sup>??</sup> 他丢掉的钢笔被我捡了。

[「彼のなくした万年筆が私に拾われた。」の意味]

b' 他丢掉的钢笔被我捡<到了>。

[彼のなくした万年筆が私に拾われた。]

例 (4b) と同じ動機づけを有する例 (5b) も、次のように様態補語 (“好”) が付加されると家が建てられる状態から出来あがる状態までの変化を表す例 (5b') として成立する。

(5) b\* 房子被盖了。

[「家が建てられた。」の意味]

b' 房子被盖<好>了。

[家が建てられた。]

以上、他動詞の受身文における受容性を動詞の意味特徴の観点から分析した。“扔”と“捡”はいずれも「動作性」を有する他動詞であるものの、それぞれ受身文での受容の度合いが異なっている。“扔”は事物の「離脱」を表す代表的な動詞であり、“扔”と同じ性質を持つ動詞には他に“拆、撕、拔”等がある。これらは「動作性」だけではなく「結果性」をも具えているため、助詞“了”を付加するだけで受身文

の述語となれる。

一方、“捡”は事物の「獲得」を表す動詞の代表であり、“捡”と同じ性質を持つ動詞には他に“盖、织、做”等がある。これらは「動作性」しか具えていないため、受身文の述語になる際には「結果性」を補足する成分を付加することが必要である。

### 3. 補語の述語に対する影響

第1節でみたように、述語の「動作性」と「結果性」は受身文の成立を左右する重要な条件となっているといえる。本節では、受身文の成立には条件を満たす動詞以外にも補語からの影響も関与していることについて検討する。

马真（1997：164）は多くの受身文が望ましくない事柄を表す場合に用いられることを次のAとBの例で説明している（体裁は引用者）。

図 1

A	B
(9) 衣服被他 <u>撕破</u> 了。 [服が彼に引き裂かれた。]	(9)' *衣服被姐姐 <u>做好</u> 了。 「(直訳)：服が姉に作られて出来上がる。」の意味
(10) 饭被我 <u>煮糊</u> 了。 [(直訳)：ご飯は私に焦がされてしまった。]	(10)' *饭被我 <u>煮好</u> 了。 「(直訳)：ご飯が私に作られて出来上がる。」の意味
(11) 麦子被雨 <u>淋</u> 了。 [麦は雨に濡れてしまった。]	(11)' *麦子被太阳 <u>晒干</u> 了。 「麦は太陽で乾かされた。」の意味

Aは述語が望ましくない事柄を表し、受身文として成立するのに対し、Bは述語が望ましい事柄を表すために成立しないと马真（1997：164）は指摘している。これを踏まえ、马真（1997：164）では非文として扱われている“麦子被太阳晒干了。”という例について、本稿なりの見解を提示してみる。

ある事柄が望ましいか否かという問題は、発話者の立場や状況次第である。上のAにおける述語（“撕破了”、“煮糊了”、“淋了”）はいず

れも発話者にとって望ましくない事柄である。特に例(9)と(10)における補語(“破”と“糊”)は受け手にとって望ましくない変化が生じることを表しており、例(9)～(11)は自然な受身文として成立する。一方、Bの(9)’、(10)’は発話者にとって望ましい意味を表す補語(“好”[できあがる])をとっており、受身文として成立しない。問題の例(11)’については、補語(“干”)は必ずしも望ましい事柄を表すとは限らない。A組の望ましくない事柄を表す例(11)(“麦子被雨淋了。”)に比べて、(11)’が望ましいニュアンスを見出されているが、実は望ましくない事柄の文脈があれば、“干了”は受身文に用いることができる。例えば、

(12) a 麦子被太阳晒干了, 不能吃了。

[麦は太陽に枯らされてしまって、食べられなくなった。]

b\* 麦子被太阳晒干了, 可以吃了。

[「麦は太陽で乾かされて、食べられるようになった。」の意味]

例(12)のaとbは前半こそ同じ内容であるものの、後半はそれぞれ否定と肯定を表す文脈が付加され、意味的特徴も異なってしまう。

(12a)は程度が予想を超えて、望ましくないものとなっているのに対し、(12b)の方は程度が期待通りの望ましいものとなっている。このような性質を持つ補語には“干”以外に“深”“大”“短”“多”“长”等といった事物の性状を説明する形容詞がある。“短”の例で見てみる。

(13) a 裤子被妈妈改短了, 不能穿了。

[ズボンの丈が母に短く直されて、はけなくなった。]

b\* 裤子被妈妈改短了, 能穿了。

[「ズボンの丈が母に短く直されて、はけるようになった。」の意味]

例(13)は例(12)と同様、補語の“短”は褒義も貶義も持たないものであるため、文全体が望ましい事態を表しているのか否かを決定することはできない。この場合は文自体からではなく、発話者の立場や文脈(“不能穿了”や“能穿了”等の情報)によって判断するしかない。



以上により、事物の性状を説明する補語からなる受身文では、ある事柄が望ましいか否かは述語動詞や補語だけでは決められず、前後の文脈や発話者の立場に左右されることがわかる。この「望ましい事柄に用いられる受身文」についての詳細な分析は今後の課題としたい<sup>4</sup>。

#### 4. おわりに

本稿では他動詞が受身文の述語になる際の制約条件について考察した。先行研究では、二音節の動詞については修飾する成分がなくても単独で受身文の述語になれると指摘されてきたが、これ以外に他動詞が「動作性」と「結果性」を具えているか否かということも受身文成立の前提条件となるというのが本稿の結論である。

「動作性」と「結果性」の表され方は動詞の構造によって異なる。動補構造をとる二音節動詞は前の成分が「動作性」を表し、後の成分が「結果性」を表すため、単独で受身文の述語となれる。これに対し、「結果性」が動作の実行に付随しない動作動詞が受身文の述語になる際には、補語が付加されなければならない。

また、同じ動作動詞であっても、その意味特徴によって受身文で用いられる場合の容認度が異なってくる。「離脱」や「消失」の意味を表す動詞（例：“扔”、“拆”等）は受け手に働きかけることによって事物の状態を変化させる意味特徴を表すことができるため、受身文での受容性が強く、助詞の“了”さえあれば受身文の述語となれる。これに対し、「獲得」や「出現」の意味を表す動詞（例：“捡”、“盖”等）は「動作性」を具えているのみなので、補語が付加されなければ受身文の述語とはなりにくい。

また本稿では、他動詞からなる受身文における補語のニュアンスについて検討を行った。通常、受身文は望ましくない事柄を表す。このことは一般に動詞の後に来る補語の性質から読み取れる。しかしながら、物事の性質を説明する形容詞（例：“长”、“重”、“深”、“短”、“轻”）が受身文の補語となる場合には、その文の表す内容が発話者にとって望ましいか否かを示す文脈が必要である。

## 注

- 1 中国語の他動詞の定義は研究者によって異なるが、基本的には目的語をとれる動詞が他動詞であると認められている。しかし、この定義ですべての動詞を一元的に分類できるわけではない。例えば動詞の“死”は目的語を伴わずに用いられる場合もあれば(例:“他父亲死了。[彼の父は死んでしまった。]”)、目的語を伴って用いられる場合もある(例:“他死了父亲。”[彼は父に死なれた。])ため、この定義では他動詞であるか否かを判断できない。本稿は胡裕樹・范晓(1995:140)が指摘している条件と一致する動詞を他動詞として取り扱う。つまり、
  - ① 仕手主語文において特定の条件がない限り必ず目的語を伴わなければならない述語動詞で、
  - ② いわゆる仕手主語は能動的な動作を行う主体となっている
 という二つの条件に合致する動詞である。  
 これに基づくと、例えば“甲队打败了乙队。[甲チームが乙チームを打ち負かした。]”における述語の“打败”や“我赞成他说的话。[彼の話に賛成する]”における述語の“赞成”のような動詞が他動詞となる。
- 2 例(4)と(5)の容認度はインフォーマントチェックによって得られた結果である。
- 3 呂叔湘主編(1992:219)は助詞“了”を二種類に分類している。“了<sub>1</sub>”は動詞の後に用い、主として動作の完了を表す。“了<sub>2</sub>”は文末に置き、主として事態に変化が起きたこと、あるいは今にも変化が起きそうなことを示し、文を完結する働きを持つ。
- 4 本稿では述語の「動作性」と「結果性」が受身文成立の重要な条件となっているという結論を得たが、動詞以外に主語も一定の条件を満たしている必要がある。黄伯荣・廖旭东(2003:125)は“被”構文における主語の性質について、“主语所表示的受事必须是有定的。”[主語の表す受け手は必ず定でなければならない。]と指摘している。つまり受身文に用いられる動詞が「動作性」と「結果性」を具えるものであっても、受け手主語が既知の事物でなければ受身文は成立し得ない。例えば“\*一本书被他撕破了。[一冊の本が彼に裂かれた。]”は成立しないが、主語が定になる(例えば、“一本书”の前に“这”や“那”が付加される場合)と成立するのである。

### 主要参考文献

- 木村英樹 1992. 「BEI 受身文の意味と構造」, 『中国語』, 第 6 号, pp. 10-15, 内山書店。
- 呂叔湘主編 1992. 『現代中国語用例辞典』牛島徳次 監訳 (《现代汉语八百词》商务印书馆の邦訳), 東方書店。
- 劉月華主編 1991. 『現代中国語文法総覧』(上、下), 相原茂 監訳 (《实用现代汉语语法》商务印书馆の邦訳), くろしお出版。
- 范晓 2006. 〈被字句谓语动词的语义特征〉, 《长江学术》, 第 2 期, 武汉大学文学院, pp. 79-89。
- 胡裕树・范晓 1995. 《动词研究》, 河南大学出版社。
- 黄伯荣・廖序东 2003. 《现代汉语》(下), 高等教育出版社。
- 马真 1997. 《简明实用汉语语法教程》, 北京大学出版社。
- 桥本万太郎 1987. 〈汉语被动式的历史・区域发展〉, 《中国语文》, 第 1 期, pp. 36-49。
- 王还 1983. 〈英语和汉语的被动句〉, 《中国语文》, 第 6 期, pp. 409-418。